

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780309

研究課題名(和文) 都市的生活様式とその変動要因の解明 時系列比較と国際比較から

研究課題名(英文) The Differences of Urban Ways of Life: The Comparison of Period and Nations

## 研究代表者

赤枝 尚樹 (Akaeda, Naoki)

関西大学・社会学部・助教

研究者番号：50645546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：今回の研究成果としては、第一に、現代日本における都市的生活様式とその生成メカニズムを体系的に明らかにしたことが挙げられる。その結果、現代日本においてフィッシャー・ウェルマンの第三の潮流の議論が支持されることが明らかとなり、成果は単著として出版している。また、第二に新しい都市度尺度の開発を進めた。GIS(地理情報システム)によって全国調査の抽出地点の人口ポテンシャルを算出し、人口ポテンシャルと人口規模をはじめとした従来の都市度尺度とその有効性について比較した。その結果、人口ポテンシャルのほうが全体として説明力が高かったため、新しい都市度尺度としての人口ポテンシャルの可能性が示唆されたといえる。

研究成果の概要(英文)：This research obtained two findings as follow. First, this study revealed that the subcultural theory of urbanism presented by C.S. Fischer and the community liberated perspective suggested by B. Wellman are generally supported in modern Japan. These results are published in book form. Second, this research also developed the scale of urbanism. Focusing the population potential as a new urbanism scale, I compare the effect of the population potential on ways of life and the effect of conventional scales of urbanism such as the population size on ways of life. As a result, this study found that the population potential is better than conventional scales of urbanism in order to explain the differences of personality and social networks among place of residences.

研究分野：都市社会学

キーワード：都市的生活様式 パーソナル・ネットワーク 非通念性 同類結合

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の第一の背景として、現代日本において無縁社会の議論が広まっており、特に、「都会の無縁」が想定されながら議論がなされていることが挙げられる。しかしながら、実際に全国調査データを用いて、日本において本当に「都会の無縁」が生じているのかどうかを検証した研究はほとんどなされていない。

(2) また、第二の背景としては、現在もっとも有力な都市理論として扱われている C.S. フィッシャーの下位文化理論が日本において体系的に検討されていないという点も挙げられる。従来の「都会の無縁」の議論とは逆に、フィッシャーは、都市ではむしろより多くの人の中から選んで紐帯を作っていくことができることから同類結合が生じやすく、多様な下位文化が生まれてくるという議論を展開している。しかしながら、全国調査で体系的に検討した研究は行われておらず、日本に下位文化理論を適用できるか否かについては検証を進めていく必要がある。

(3) 第三に、人口規模を中心とした従来の都市度尺度について批判もなされており、新しい都市度尺度の開発が望まれている。

(4) 第四に、時代や国という社会背景が異なる状況下では、都市的生活様式とその生成メカニズムも異なる可能性も考えられるが、その点についてもほとんど検証されてこなかった。

## 2. 研究の目的

(1) そこで本研究では、現代日本の全国調査データを用いて、「都会の無縁」をモチーフとした「L. ワースらシカゴ学派の社会解体論」に加え、「フィッシャー下位文化理論」などの他の都市のイメージに関する都市理論を総合的に検討することを目的とする。そのことをとおして、「都会の無縁」という一般的なイメージとともに、現在最も有力な都市理論であるフィッシャーの下位文化理論の日本への適用可能性についても議論を進めていく。

(2) また、人口規模をはじめとした従来の都市度尺度の限界が指摘されていることを受け、新しい都市度尺度としての可能性が指摘されている人口ポテンシャルについて、実証的な観点からその尺度の可能性を検討することを第二の目的とする。

(3) さらに、特に日本においては都市的生活様式の時系列比較がほとんどなされていないことから、都市的生活様式の日本における時系列比較を行うことも試みる。

## 3. 研究の方法

(1) 研究の方法としては、第一に、多段無作為抽出法によって居住地と個人が無作為に抽出された全国調査にマルチレベル分析を適用するというものが挙げられる。多段無作為抽出法によって抽出されたデータを用いることで、居住地特性としての都市度と、パーソナル・ネットワークや意識といった個人の特性の関連を検証することができる。また、そうしたデータに、近年世界中で注目されている統計解析手法であるマルチレベル分析を適用していくことで、よりデータと理論に適した分析を行うことができるのである。こうした方法を用いて、都市理論における主要な論点である「第一次的紐帯に対する都市効果（コミュニティ問題）」「同類結合に対する都市効果」「都市的疎外に対する都市効果」「非通念性（通念にとらわれない傾向）に対する都市効果」を総合的に検証していく。

(2) また、新しい都市度尺度としての人口ポテンシャルの検討を進めるにあたっては、多段無作為抽出法による全国調査データとともに、GIS（地理情報システム）を用いた分析を行う。GIS と小地域統計を組み合わせることによって、無作為に抽出された抽出地点ごとに人口ポテンシャルを算出することができる。したがって、これらの方法を用いることにより、人々のパーソナル・ネットワークや意識などの生活様式に対して、人口規模をはじめとした従来の都市度尺度と、人口ポテンシャルのどちらが説明力が高いのかということについて、比較検討することができるのである。本研究では、人々のパーソナル・ネットワークや意識、行動などの幅広い項目に対して、従来の都市度尺度と人口ポテンシャルの効果を比較していくこととする。

(3) さらに、都市的生活様式とその生成メカニズムに関する時系列比較については、1993 年に行われた「第 1 回都市生活と家族に関する意識調査」と 2014 年に行われた「第 2 回都市生活と家族に関する意識調査」を比較し、都市度による生活様式の差異がどのように変化したかを明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) 研究成果としては、第一に、日本版 General Social Survey (JGSS) 2003 や情報化社会に関する全国調査 (JIS 調査) などの日本の全国調査データを用いて都市理論における主要な論点を検討した。その結果、「第一次的紐帯に対する都市効果」については、都市が人々の第一次的紐帯を失わせる傾向は確認されず、むしろ都市が非親族的紐帯を増加させると同時に、ネットワーク密度を減少させることが明らかとなった。また、「同類結合に対する都市効果」については、日本では都市が趣味的同類結合を促進することがわかった。さらに、「都市的疎外に対する都市効果」を検証したところ、日本において、

都市は人々の無力感を増幅させるわけでも、規範を崩壊させるわけでもなく、さらには孤立感を増加させるわけでもないことがわかった。その結果、都市で様々な疎外が生じた都市疎外理論が棄却された。さらに、「非通念性に対する都市効果」を検証したところ、都市がフィッシャーとウェルマンの想定したメカニズムによって、非通年性の別々の面を促進することが明らかとなった。以上の結果は、日本の全国的な傾向について、「ワーストシカゴ学派の社会解体論」よりも、「フィッシャー下位文化理論」が支持されることを示すものである。なお、日本においてフィッシャー下位文化理論を体系的に検証したのは本研究が初めての試みといえる。その成果は、単著として出版された。

(2)また、人口規模をはじめとした従来の都市度尺度と、新しい都市度尺度としての人口ポテンシャルの効果を比較検討するために、JIS 調査を用いて、人口規模と人口ポテンシャルがパーソナル・ネットワークや意識、行動の 122 項目に対してどのような影響を与えるかについて検討した。その結果、パーソナル・ネットワークや意識、行動に対して、人口ポテンシャルは人口規模よりも強い関連を示すことが明らかとなった。また、2010 年格差と社会意識についての全国調査 (SSP-I2010 調査) を用いた同様の検討によっても、ほぼ同じ分析結果が得られている。以上の結果は、人口規模をはじめとした従来の都市度尺度よりも、人口ポテンシャルがより有力な都市度尺度であることを示唆しているといえる。したがって今後も、人口ポテンシャルを中心に、新しい都市度尺度の開発を進めていく必要があるといえる。

(3)そして、都市的生活様式とその生成メカニズムに関する時系列比較を行うために、「第 1 回都市生活と家族に関する意識調査」と「第 2 回都市生活と家族に関する意識調査」を比較し、1993 年と 2014 年の約 20 年間の生活様式の差異を検討した。その結果、特に地方都市の山形において趣味的同類結合が生じやすくなるなど、都市度による差異が減少傾向にあることが明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 3 件)

赤枝尚樹、親密な友人関係における同類結合の変化、石黒格編『第 2 回都市生活と家族に関する意識調査 結果報告書』平成 25 年度～27 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書、査読無し、2016 年、100-114。

赤枝尚樹、都市度尺度としての人口ポテンシャルに関する再検討、関西大学社会学部紀要 45 巻 2 号、査読無し、2014

年、249-265。

赤枝尚樹、新しい都市度尺度の確立に向けて—距離と移動時間に注目した都市度尺度の提案、日本都市社会学会年報 31 号、査読有、2013 年、77-93。

### 〔学会発表〕(計 4 件)

赤枝尚樹、ソーシャル・キャピタルと幸福—国の公的社会支出は家族関係の意味をどのように変えるのか、第 88 回日本社会学会大会、2015 年 9 月 19 日、早稲田大学 (東京)。

赤枝尚樹、福祉レジームによる家族・親族関係の効果の差異—幸福感に関する国際比較研究から、第 59 回数理社会学会大会、2015 年 3 月 14 日、久留米大学 (福岡)。

Akaeda, N., The Variety of Influence of Social Capital on Health in Welfare State Regimes, 18th International Sociological Association World Congress of Sociology, 2014 年 7 月 16 日、Pacifico Yokohama (神奈川)、査読有。

赤枝尚樹、ソーシャル・キャピタルと主観的健康感の関連に関する国際比較研究—福祉レジーム論に注目して、第 86 回日本社会学会大会、2013 年 10 月 12 日、慶應義塾大学 (東京)。

### 〔図書〕(計 3 件)

赤枝尚樹、世界思想社、都市の社会学、数理社会学会監修、筒井淳也・神林博史・長松奈美江・渡邊大輔・藤原翔編『計量社会学入門—社会をデータでよむ』、2015 年、284 ページ (144-155)。

赤枝尚樹、有斐閣、都市とネットワーク、数土直紀編『社会意識からみた日本』、2015 年、290 ページ (226-228)。

赤枝尚樹、ミネルヴァ書房、現代日本における都市メカニズム—都市の計量社会学、2015 年、227 ページ。

### 〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

赤枝 尚樹 (AKAEDA, Naoki)

関西大学・社会学部・助教

研究者番号：50645546

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：